北の国から
'87 初恋

SCENARIO 1987

倉本聰

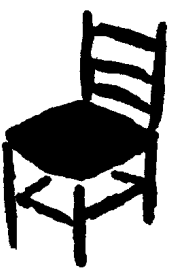
RIRON-SHA

SCENARIO 1987

倉本聰

北の国から

'87初恋



理論社

北の国から'87初恋

著者　倉本聰

制作　小宮山量平

発行　山村光司

株式会社　理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話　〇三(203)五七九一

振替　東京九―九五七三六

発行日　一九八七年五月　第八刷

©Sô Kuramoto 1987 Printed in Japan
NDC 912 四六判 20cm 196p. ISBN4-652-07134-5
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

倉本 聰 作品

装幀・装画　小野州一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北の国から ’87初恋

本書は一九八七年三月二七日フジテレビ系全国ネットで放送されたドラマのシナリオです。

紅葉

ドタドタと床板を走る音がする。

男の子1の声「ペンチはどこだ」

男の子2の声「どうしたンだ」

校舎・廊下

向い合っている男の子の足。

男の子1「シンジュクさんが探してる。ヤバイぞ」

男の子2「シンジュクさんって電機屋のシンジュクさんか」

男の子1「ああ」

男の子2「どうしたンだ」

男の子1「あいつチンタンち停電さしたンだ」

男の子2「またかよオ」

校庭

急ぎ足に横切る別の男の子たち。

男の子3「三日前だろ、ミサンちのヒューズとばしたの」

男の子4「同じ日に高木ンちの冷蔵庫こわした」

男の子3「ペンチだら何でも分解するンだから」

男の子4「シンジュクさん怒らしたらマジに恐いぜ」

男の子3「あの人、昔東京の新宿で不良したことあるンだろ」

走ってくる女の子。

女の子「ペンチ知らない?」

男の子3「どうしたンだよ」

女の子「シンジュクさんが探してる!」

どこかで柱時計の音が鳴る。

学校（麓郷中学）

間の抜けたような時計の音が、いくつもいくつも続けて鳴る。

教室

床。

時計を分解した純。

鳴りだして止まらなくなった時計を、あわててあちこちいじっている。

時計やっと止まる。

純、息をつく。

間。

分解した時計を復元しようとして――その手を中断。ドキッと顔あげる。

扉に寄りかかっている電機屋の宮田寛次（通称シンジュク）。

語「アタア――」

宮田。

間。

宮田「今度ァ時計の分解か」

純「イェアノ、今もとにもどすところです」

間。

宮田「ゆうべは夜中に呼び出された」

純「――」

宮田「三日ほど前は一日に二度だ」

純「――」

宮田「停電さすのも結構だけど、オラァ町から二十キロ、そのたびに呼び出されてとんでくるンだ」

純「――」

間。

宮田「昨夜ァいったい何しようとした」

純「――」

宮田「怒らねえからいってみろ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

純「――」

間。

宮田「いえッ!!!」

純「ハ、ハイ、アノ、扇風機とアイロンくっつけてドライヤー作ろうってやってい
て――」

間。

宮田「科学するのァいいことだ」

純「――」

宮田「おめえが何でも機械見つけると分解したくなる気持はよくわかる。昔ァおれも
結構やった」

純「――」

宮田「だけど物にァ限度ってもンがあるぞ」

純「――」

宮田「夜中に呼び出されるオラの身にもなってみろ」

純「――」

間。

宮田「ペンチ」

純「ハイ」

宮田「お前ンちにまだ電気のねえことはオラ知ってる。大変だなって同情はする。けど、だからって電機屋の車のヘッドライトまで分解するこたァねえべ」

純「イヤ、ボ、ボク知りません」

宮田「ウソをつけ！」

純「ホントです！」

宮田「オラの車のヘッドライト、五日前」

純「ちがいます！　ボクじゃない！」

宮田「ウソつけ!!」

純「本当です」

宮田「このヤロウ」

純「イヤ本当にそれは」

激しくもめる声、急に遠くなり、

五郎の声「先生、オラにはよくわからんのです」

麓郷木材・工場

夕陽の中に立っている五郎と受持の先生。

五郎「あいつだら、本当に近頃ァオラが、話しようとしてもスッと避けるし」

先生「――」

五郎「進学のことだって何度もいっとるです。都会とちがって高校へ行くときが将来まで決める大事なときだぞって」

先生「――」

五郎「したっけあいつは何も答えんです」

先生「――」

間。

五郎「先生、どうも情けない話だが、オラにはあいつが最近どうも、わからんようになってきとるンです」

先生「――」

音楽――テーマ曲、イン。

タイトル流れて。

1

道

急ぎ足で歩く、純と広介。

純「チンタが!?」

広介「ああもうのぼせちまっててよ」

純「どこの女の子」

広介「いわねえンだ。したっけめんこいめんこいって」

純「下級生か」

広介「いやそれがうちの学校の娘じゃないらしい」

純「よその学校の子か」

広介「チンタのやつ興奮して眠れねえンだって」

空地（人参工場裏）

チンタをこづく広介と純。

広介「いえばいいべさ」

純「いえよコノ水臭えな」

チンタ「だから見せるって」

広介「いつよ」

チンタ「今度の土曜」

純「どこで」

チンタ「町行って」

広介「町？」

純「そいつ町の娘？」

チンタ「だから見せるから」

広介「どこまでいったのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com